

「光らない灯台よりも無防備な／洗髪台で伸びる首筋」常田瑛子（山口県）

主格の身体を遠景のように眺めるまなざしが貴重。人間には見えないものをみようとしています。

「スカートに海が欲しくて襞よせる」桜庭紀子（和歌山県）

襞のあいだに生まれる海が魅惑的。こんな身近なところにリアス式海岸があったとは！

「立春の腕ぶんまわし／する化粧」絵巻（東京都）

「ぶんまわし」の大胆な言い回しが、主格の大きさを思わせます。春の訪れのようなものを想像すると同時に、ひとも自然の一部なのだ、と改めて思います。

「読みかけの／本をぼしんと閉じてみる／栞にしたい／夕焼けだった」野中周太郎（福岡県）

本を閉じた音の余韻、というかたちのないものが残り、夕焼けに引き継がれています。

「春の昼ただ手であるを手にゆるす」鶯浦るか（富山県）

このような幸せな「手」を誰もが持てる社会を、素朴で明るい手のひらが照らし出しています。

「口喧嘩／全部を見てた／醤油差し」俺の背中はやや狭い（北海道）

急須ではなく、醤油差しというさりげないものであるところが鋭いと思います。よりユーモラスに、差し口とひよつとこの口が結びつきました。

「感情をしたいです／ゆっくり／感情をしたいです」飯塚ほほみ（神奈川県）

これは若者コトバの類いとは違うものでしょう。こんなにさわやかな動詞化にはなかなか出合えません。

「ザーザー／カチッ／ザザッザーザー／祖父のラジオ」宮川奈央（福岡県）

「カチッ」のところに生きた祖父がいる。その一点において、私は感動しているような気がします。

「さようなら／血を分けあった蚊を潰す／祈りはいつも棺のかたち」ケムニマキコ（京都府）

「祈りはいつも棺のかたち」という言葉が抜群。それが示唆する構造は「蚊」にも人間にもいえるものでしょう。壮大なテーマを孕んでいます。

「金平糖がうつくしいので／こくり躰におさめては鏡台を覗く」川谷 亘（京都府）

金平糖を透かせるほどの、子どもの透明な身体を思います。鏡に映してその光具合を自分で確認しているのかもしれませんが。

次回も楽しみにお待ちしております。